

## 偉大なるジャムおじさん・

### くまモン先生...

## 恩師・高橋隆雄先生を偲んで

藤井 可, M.D., Ph.D.

### 1. 生涯現役の学究

大学院の恩師としての高橋先生は、私たちを見限ることなく尊重して、厳しく指導してくださいました。様々なバックグラウンドを持った多様な年代の学生を寛容に受け入れてくださったおかげで、多くの人が世界を切り拓くチャンスを得ることができたと思う。一方で、討論コンパ、環境倫理の実践としての獣肉 BBQ、台湾でのフィールドワーク等、高橋先生ならではの楽しいイベントも多々思い出される。

先生は、今年3月に「日常化の傾向性と仏性：ガン闘病体験に基づく考察」を『先端倫理研究』（熊本大学倫理学研究室紀要）に発表され、4月には、監訳をされた『災害の倫理 災害時の自助・共助・公助を考える』が発行された。学究の手を最期まで緩めることなく継続されたのだった。

### 2. 現代に生きる「共災」思想

この約10年の間、先生が追いかけておられたテーマの一つが「災害」である。東日本大震災直後の5月5日、東京の学士会館で、鬼頭秀一先生らの呼びかけによって「3.11 震災・原発についての環境倫理・環境哲学緊急特別集会」が開かれた。当時、佐賀大学医学部の特任講師として生命倫理学を教えていた私は、鬼頭先生の SNS で会の開催を知り、急遽参加を決めた。参加の意思を高橋先生にお伝えすると、すぐにまとまったメッセージを送ってくださったので、当日、代読させていただいた。一部を抜粋する。

現在、私は「共災」ということについて考えているところです。まだまとまっておらず、脈絡のない話ではありますが、大雑把には次のようなことを考えています。

人間が環境とくに自然環境に対してどのような態度をとるべきなのかについて、自然との「共生」のもつニュアンスは甘い夢のように思えます。自然と人間の関係はもっと厳しいものです。それでは「防災」がよいかと言うと、これも人間が自然を制御できるかのような印象を与えがちです。人間にできるのは、災害の被害を最小限にすることくらいです。災害と人間は手を切ることができないのだという視点を重視するべきだと思います。すると、防災よりも「共災」の方が相応しいでしょう。

私は、これまで生命倫理と環境倫理をケアの概念で統合することを主張してきましたが、今はそのことの意義を強く感じています。人間も自然も生命の一種であるというアニミズム的考えがここにはあります。災害との関係での「共災」の態度は、病気との関係での「病気との共存」と類比的に考えることができます。「病気との共存」についてのこれまでの知見が「共災」の具体的あり方を探るうえで役に立つと思います。

このとき先生が生み出された「共災」の思想は、以降の世界の災害対応の在り方を確実に変えつつあると感じている。まさに、応用倫理学の真の役割を遂行されたといえる。

熊本は、平成28年には地震を経験し、幾度も風水害の被害を受け、今は COVID19 に巻き込まれている最中である。コロナ禍の中、現在は行政医師として働いている私に対する、高橋先生からの最後のメールは次のように締めくくられていた。

今風に言えば「めっちゃ忙しい」でしょうが、大事な仕事です。自分を守りつつ、何とか乗り切ってください。災害論の領域では、感染症の蔓延は災害に当たります。まさに災害対応といえます。

### 3. 恩師に学ぶ実践倫理

高橋先生と近い方には怒られるかもしれないが、先生と私は、生命に関する思索、興味の対象、人間のとらえ方が似ていたと思う。スケールも能力も、先生にまったく及ばないのは当然であるが、おそらく脳のタイプの方向性が近かったのではないかと個人的には思っており、かつて先生もそのようにおっしゃったことがある。高橋先生が世の中に与え続けておられた良い影響を、代わりに発することはとてもできないが、学問における遺志を継承する者の一人として、これからも、いかなる立場であっても、社会の中で生きながら、生命に関する倫理学の研究を続けていこうと思う。

(ふじい たか 熊本市役所行政医師)